

品種の紹介

高温耐性が優れる水稲新品種「歓喜の風」、「秋はるか」の育成

【はじめに】

基幹水稲品種である「ヒノヒカリ」、「コシヒカリ」等は、近年の登熟期間の高温による玄米の外観品質の低下に加えて、生育期間の高温に伴ういもち病、縞葉枯病、トビイロウンカ等の病害虫の被害が問題となっています。そこで、高温条件下での登熟と病害虫に強い早生（わせ）水稲新品種「歓喜の風」（平成29年6月1日に品種登録出願）と中生（なかて）水稲新品種「秋はるか」（平成29年6月7日に品種登録出願）を育成しました。

【品種の特性】

「歓喜の風」は、「キヌヒカリ」、「コシヒカリ」と熟期が同じ早生の品種です（写真1、表1）。稈長は「キヌヒカリ」と同程度に短く、比較的倒伏しにくいいため、野菜の後作など肥料の残効があるような条件でも栽培が可能です。玄米は「キヌヒカリ」より約10%多収です。また、登熟期間が高温であっても玄米の外観品質が優れ、御飯の食味が優れます。

「秋はるか」は、「ヒノヒカリ」と熟期が同じ中生

で、玄米は「ヒノヒカリ」より15%多収で、倒伏しにくい品種です（写真2、表1）。また、いもち病や縞葉枯病に強く、西日本で被害が頻発しているトビイロウンカに対しても「にこまる」より強い抵抗性を持っています。登熟期間の高温への耐性は「にこまる」より優れ、御飯の粘りは「ヒノヒカリ」ほど強くありません。

【普及の状況】

「歓喜の風」は、静岡県でレタスなどの冬春野菜の後作に多収で玄米の外観品質と御飯の食味が優れる早生水稲品種として、産地品種銘柄の指定を受けて平成30年度は約10haが作付けされ普及しています。「秋はるか」は、高温登熟や病害虫に強いことから安定生産が期待でき、農薬を減らした低コスト生産に適した品種として、佐賀県、静岡県等で試作が行われています。

【水田作研究領域

片岡知守、田村克徳、竹内善信】



写真1 「歓喜の風」の倒伏しにくく多収な草姿
「キヌヒカリ」（左の3列）と「歓喜の風」（右の4列）。



写真2 「秋はるか」の健美で多収な草姿
「ヒノヒカリ」（左の2列）、「秋はるか」（中央の4列）と「にこまる」（右の3列）。

表1 「歓喜の風」、「秋はるか」の栽培特性

品種名	出穂期 (月・日)	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	倒伏 (0無倒伏 ~5完全倒伏)	玄米 重 (kg/a)	同左 比率 (%)	千粒 重 (g)	玄米外 観品質 (1良~ 9否)	食味	
									総合 (5優~ -5劣)	粘り (3強~ -3弱)
標肥栽培 (2009~2016年)										
歓喜の風	8.15	82	338	0.3	55.9	109	22.8	5.4	-0.16	0.00
キヌヒカリ	8.13	79	315	0.1	51.1	100	22.3	6.0	-0.33	-0.35
標肥栽培 (2011~2016年)										
秋はるか	8.28	87	322	0.2	56.7	115	22.9	4.5	-0.33	-0.25
ヒノヒカリ	8.25	83	343	0.6	49.4	100	22.6	6.3	0.11	0.04

標肥栽培のチッソ成分：0.80kg/a。食味評価は、2009~2013年は「コシヒカリ」基準、2014~2016年は「ヒノヒカリ」基準で実施。九州沖縄農業研究センター筑後研究拠点にて栽培。